

2017年度 危機管理士1級セッション 報告レポート

日本自治体危機管理学会 2017年度 研究大会 分科会Ⅱ
2017年10月28日 リバティータワー11階

2017年10月28日の日本自治体危機管理学会研究大会「分科会Ⅱ」におきまして、危機管理士1級セッションが開催されました。危機管理士1級の3名の方にご登壇いただきました。

「災害時における危機管理士としての活動を考える」

村上 智哉さん（大船渡市 商工港湾部 商工課 主任）



大船渡市における東日本大震災当時の状況から、今日までの復旧を振り返りました。これに危機管理士制度が5年目になり、実際に支援活動に出ている方がいる現状を交え、支援する際の強みと課題について、ご意見をまとめていただきました。

「銀河連邦」という親交のある自治体からの支援が有効であった、というお話が印象的でした。日頃から信頼できる関係を築き、顔と名前が一致する関係があったからこそ、すぐに支援を得られたそうです。これは、1995年の阪神・淡路大震災翌に締結した「銀河連邦を構成する市町の災害時における相互応援に関する協定」によるもので、2011年3月11日に初めて発動されたそうです。

危機管理士派遣のスキームや所属がわかりやすいもの（何者かわかる「ジャケット」など）やPC関連機器の準備など、速やかな支援に有効だと思われるものを共有いただきました。

次ページにつづく

「被災地支援活動から見た課題と提言
～平成 28 年熊本地震・平成 29 年九州北部豪雨災害から～」
後藤 武志さん（飯田市 危機管理室 防災係長）



平成 28 年の熊本地震と平成 29 年の九州北部豪雨災害に際し、実際に支援に行ったご経験を元に、有効な事柄と求められる課題について提案いただきました。後藤さんご自身の講演をきっかけに、顔と所属等が一致する人間関係が構築されていたからこそ、スムーズに支援・受援の関係が成立した、というお話がありました。日頃から「顔の見える関係」が重要だとのこと。被災者の目線に立ち、り災証明のあり方など、再考すべき点についても、ご提案がありました。危機管理士として、まずは経験と知識をより早く被災地に届けようとする、後藤さんの姿勢が伝わるご報告でした。

「山形大学工学部入試合否判定過誤事件に関する一考察」
山崎 淳一郎さん（北海道大学 研究推進部長）



山形大学工学部における入試合否判定過誤事件が起きた当時に、ご本人が総務課長として在席されていたことをきっかけに危機管理士を志すようになったとのお話で始まりました。事件の概要説明と共に、なぜ起きたのか、何が問題だったのか、などをわかりやすくお伝えいただきました。また、参加者の質問を受け、その後対象者にどのような対策をとったか、について説明がありました。情報隠ぺい自体を再考し、初期リスクや事故発生後の対応など、包括的に考える機会となりました。

以上